



兵庫県立但馬やまびこの郷

Web版／令和4年2月 虹のかけ橋

<http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

不登校児童生徒への充実した支援に向けて

当所では不登校児童生徒への対応について理解を深めるために、不登校に関する研修会を今年度4回実施し、4名の先生にご講義をしていただきました。その一部を紹介します。

第1回

日 時：8月10日（火） 姫路市市民会館

テーマ：「不登校の子どもと保護者の元気を引き出すブリーフセラピー」

講 師：坂本 真佐哉（神戸松蔭女子学院大学・教授）



ブリーフセラピーでは、人と人との間に注目し、原因追及よりも解決のストーリーに目を向けるようにしている。問題がないときに目を向けたり、良い変化に注目したり、その人が持っている強さを活かしたりするようにしている。問題の消失だけが、解決ではない。「正しいこと」よりも、その人にとって効果のあることや役に立つことをともに探っていく必要がある。困っている人が問題なのではなく、「問題」が問題である。支援者は、困りごとを話せるような雰囲気や状況を作っていくことが大切である。

＜受講者からの感想＞

- ・良かったことや良い変化を見出し、解決方法を考えていく手法は、不登校以外でも活用できると思った。
- ・教師として子どもを何とかしなければという思いが強すぎて、問題を消失させることにこだわりすぎていたことに気づくことができた。

第2回

日 時：8月12日（木） 県立総合体育館

テーマ：「子どもの理解と保護者支援のあり方

～『コロナ時代』の不登校の子どもに寄り添う～

講 師：春日井 敏之（立命館大学大学院・教授）



不登校児童生徒の支援にあたっては、子どもの成長を信じ、生活の中での自己決定を応援し、回復段階に応じた働きかけをしながら待つことが大切だ。子どもが学校生活などで困っているときに、保護者を責めたり否定したりせずに、ねぎらい励ますことから連携をはじめ。学校には行け

ていなくても家族の中で元気になってきたという変化は、大切な回復過程であるということを保護者と共有する。不登校の「回復」とは、学校に行けるようになることだけではなく、自分の持ち味を活かしながら、社会とつながって生きていこうとすることである。

＜受講者からの感想＞

- ・コロナの影響による子どもたちの変化や関わり方について、具体的に話していただき、わかりやすかった。
- ・日々の関わりを振り返り、自分の都合で指導していないかと、考え直す機会となった。

第3回

日 時：10月29日（金） 県立但馬やまびこの郷

テーマ：「発達特性と不登校」

講師：石原 剛広（県立尼崎総合医療センター・小児科医長）



発達障害ではなく発達特性としてとらえ、周りの人と少々違うことを受入れる。特性のある仲間を見つける。一人一人の居場所を見つけ、強みを活かして特性と共に生きていくことが大切である。発達障害とされ不登校になっている子の中には、環境においてミスマッチが起きている場合もある。不登校の期間があることは問題ではなく、その期間に何をすることが大切である。不登校であっても学習・対人スキル・検索する力などの生きていく力をつけていける場や環境を変える事が必要である。

＜受講者からの感想＞

- ・起立性調節障害と診断され、不登校になっている児童生徒に対して、その原因となる環境や条件をもって、理解することが必要だと感じた。
- ・現状を変えなければ、という思いで、不登校生徒と接していたが、まず特性を理解し、環境を変え、将来の見通しを考えた接し方を実践していきたい。

第4回

日 時：11月2日（火） 兵庫県民会館

テーマ：「不登校の子どもの育ちを支える」

講師：鳥居 深雪（神戸大学大学院・教授）



障害者差別解消法改正により、障害者への合理的配慮が法的義務になった。そのような中、可能性を最大限に発揮するために必要な力、セルフアドボカシーを幼児期から育てていきたい。自分の困難がわかる、自分に必要なサポートがわかる、必要な場面でサポートを求める、サポートが必要な理由を説明するなどのアドボケートスキルはアドボカシーのスキルである。「援助」はよりよい成果のために行う。最終目標は、その人らしく成長し、人生を送ることである。

＜受講者からの感想＞

- ・教師として、個々に応じた完全な支援を用意しておかなければ、とっていたが、「本人と話して一緒に考える」という大切な姿勢を学んだ。
- ・再登校がゴールではないこと、子どもたちの発達にあわせて、本人と話しながら、支援を考えるなど、とても勉強になった。

まこさんからのメッセージ

不登校児童生徒支援のこれまで・これから



県立但馬やまびこの郷 所長 佐藤 眞子

小・中学校の不登校児童生徒数の増加が止まりません。ここ5年をみても、平成28年度の文部科学省の調査で、全国で133,683人であったのが、翌年14万人を超え、平成30年度で164,528人、令和元年度は181,272人、令和2年度は196,127人となっており、あらためて数字をあげると、ものすごい勢いで増加しているのがわかります。令和2年度は前年度末から5月にかけて、新型コロナウイルス感染症拡大で、全国的に学校が臨時休業となった期間がありましたし、通常授業開始後も学校生活はさまざまな制限が設けられていましたから、そのことが多少関係していたかもしれません。しかし、不登校児童生徒の増加傾向は8年連続ですので、コロナによる影響だけでは説明できないのではないかと思います。

「登校拒否」から「不登校」へ

ずいぶん古い話になりますが、「不登校」は1950年代には「学校恐怖症 (school phobia)」と呼ばれていました。その後「登校拒否 (school refusal)」という概念が導入され、広く受け入れられるようになります。わが国では、なぜ「登校拒否」が生じるのか、その発現要因（犯人さがし）をめぐってさまざまな議論がなされました。その子個人に弱さや甘えがあるためではないか、母子間の母子分離不安が要因であろう、戦後顕著になった父性の不在が問題なのではないか等、要因を個人や親子関係にみようとすると議論が盛んであったことが思い出されます。その一方で、「学校が悪い」という議論も広く受け入れられていたように思います。1990年代の初め頃では、まだ教師による体罰があったり、理不尽な校則があったり、暗記中心の「詰めこみ」といわれるような教育が行われていた時代であったからかもしれません。

こうした論争を踏まえて、1992年に文部省学校不適応対策調査研究協力者会議で出された「不登校はどの子にも起こりうる現象」とされた報告から、「不登校」のとらえ方の流れが変わります。文部省（当時）の方針はソフト化し、親の会やフリースクールが拡がりを見せていきましたが、その後もやはり「学校復帰」は唱えられていました。2003年に文部科学省新協力者会議の答申がでると、学校ぐるみ、地域ぐるみで「不登校ゼロを目指そう」という取組が強化されたと言われています。



「社会的に自立すること」を目指して

不登校を経験した子どもたちは家庭や学校や地域からの働きかけやかかわり方をどのようにとらえていたのでしょうか。但馬やまびこの郷を利用していた子どもたちに、高校生や大学生、社会人になった後、当所ですごした日々を振り返ってもらいますと、さまざまな感想を述べてくれます。その中の一人は「やまびこの郷での体験は楽しかったし、元気になれたことをものすごく感謝していますが、『学校復帰を目指して』といわれることには抵抗がありました」と話していました。子どもたちには「学校復帰ありき」は重圧と感じるのでしょうか。但馬やまびこの郷で作成したリーフ

レットや冊子の類の多くには、少なくとも2017年以前では「学校復帰を目指して」という文言が当たり前のようになっています。当所では子どもたちに「自由にしていよいよ」「自分で決めていよいよ」と言っていますが、「結局は『学校に戻りなさい』ということなの？」と感じて、「抵抗があった」のかもしれませんが。

2017年以降に当所で作成したリーフレットや冊子には「学校復帰」とともに「社会的自立」という言葉が並んでいます。2016年に「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」いわゆる教育機会確保法が成立し、翌年3月に確保法の「基本方針」が出されて、「支援に際しては、登校という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要がある」とされたからです。

「休養の必要性」と『多様な学び』を支援する

「学校」という制度が教育の大きな柱であることは間違いないことですし、児童生徒が「楽しく通える学校」にすることが何よりも大切であることは言うまでもありません。とはいえ、どんなにがんばって教職員が「居場所づくり・絆づくり」に取り組んでも、子どもはすべてユニークな存在ですから、全員が「学校を楽しく感じる」ようにするのは難しく、また先生や友達との関係で行けなくなってしまいうこともあるでしょう。教育機会確保法は「学校以外の場において行う多様で適切な学習活動の重要性に鑑み、個々の不登校児童生徒の休養の必要性を踏まえ、当該不登校児童生徒の状況に応じた学習活動が行われることとなるよう」（第13条）とあり、「休養の必要性」とともに子どもの状況にあった「多様な学び」ができるよう支援することになりました。



しかし、今日でも、「教育支援センターに行かせたくない」、「但馬やまびこの郷は子どもに甘い」、「フリースクールは子どもを遊ばせているだけ」という学校関係者がおられることも確かです。「学校以外の場」での「多様な学び」ということの意味は簡単には進んでいかないのかもしれませんが、「学びは学校でなければならない」という「呪縛」は、不登校の子どもや保護者にもありますが、最もそうした「呪縛」から解放されるべきは学校関係者なのではないでしょうか。なんとしても学校復帰させたいという学校現場の執着はとても強いものがあります。意識の転換は急にはできないかもしれませんが、今後とも子どもから学びながら、子どもたちの心に寄り添った支援のあり方を模索していくことが大切でしょう。

新型コロナウイルス感染症との闘いは今も続いています（令和4年1月現在）。子どもたちも保護者も教職員も疲れがたまっています。感染拡大で私たちはたくさんものを失いました。でも、行動が制限される中であって、私たちにとって、本当に大切なのは何であるのかを気づくことができた日々でもありました。子どもたちはいずれ「コロナ時代の子どもたち」と呼ばれるかもしれませんが、とりわけこの時代に不登校を経験した子どもたちは、ゆっくり自分を見つめること、自分らしさを探ること、自分のペースで生活すること等を、コロナとともに経験したことでしょう。そして自分を大切にすることでなく、周囲の人々をも尊重する態度を身につけることができたのではないのでしょうか。